ヤブシタ

騒音・気流解析依頼が増大中

豊富な対策バリエーション紹介、特注事例集を制作

設計事務所やゼネ、サブに直接勉強会

上田　正則
ヤブシタ冷熱設備社長

藤原　崇貢課長

室外機の防雪フードを始めとした空調・冷熱機器の部材メーカーとして、トップシェアを有するヤブシタ（社長＝森忠裕氏、本社・札幌市中央区北1条西9―3―1）。同社が他社と異なる独自性を有しているのが、ビル用マルチエアコンやチラーの室外機に対して、騒音と気流の「ダブル解析」を展開していること。騒音対策のみを考えて室外機を部材で囲んでしまうと、吐き出した空気を吸い込むショートサーキットを起こすなど、気流に支障が出るケースも多い。そこで同社は騒音と気流を同時にシミュレーションし、両者を同時に解決できる対策を考案し、対策部材を特注製造している。同社に寄せられる依頼は年々増えており、依頼元である機器メーカーにも広がりが出てきている。実績が増える中、同社は昨年末、特注対策を集めた事例集を制作。気流・騒音に加えて雪害も含めて、様々な室外機の困りごとを解決した事例を掲載している。

同社冷熱・PV部東京営業所の藤原崇貢課長は、昨年、同社に寄せられた騒音・気流の解析依頼は「相当に増えている」と手応えを示す。同社は主に機器メーカーから依頼を受けているが、以前から繋がりの深い三菱電機のみならず、他のメーカーからも多くの依頼が入っており、解析チームはフル稼働が続いている。背景には、他社が防音のみの対策を施す中で、気流に支障が出てしまい、それがクレームに繋がるケースが出てきたことがある。そのため、ゼネコンやサブコンでも「気流と音が関係していることに認識が高まっている」（ヤブシタ冷熱・PV部兼ヤブシタ冷熱設備社長の上田正則氏）。

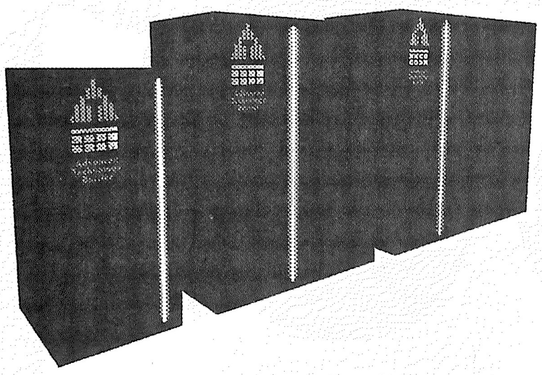
こうした中、同社は、以前は代理店向けに勉強会を開催することが多かったが、昨年からは設計事務所やスーパーゼネコン、サブコンに直接勉強会を開催することが増加。それも、以前は三菱電機と共にプレゼンすることが多かったが、直接プレゼンできる力を付けてきているという。

そうしたプレゼン力の背景には、同社の豊富な特注実績がある。対応可能なバリエーションは幅広い。そこで同社は昨年末、特注対応した事例を集めた事例集を作成。気流・騒音、雪害対策等について、その手法もフード、排熱対策、防音システム、遮音パネル、特注架台など様々な事例を紹介している。顧客が特注対策を検討する際、様々な事例を見てもらい、イメージの具体化に役立ててほしい考え。

昨年の案件の動向としては、大型データセンター案件が関東と関西で数件あったが、足元では収まりつつある。そこで今年は、中規模のデータセンター案件に対応しながら、「設備ルートにこだわらずにグループシナジーを強化していく」（上田社長）。また、設計事務所やゼネコン、サブコンへの勉強会を開催しつつ、新製品の訴求にも力を入れる。新製品としては、ショートサイクルを防止するメッシュ状部材「エアシェード」（サンシェードから名称変更）について、来年度、材質変更を含む大幅なモデルチェンジを予定。加えて、最近では「（W解析もそうだが）騒音単体での依頼も増えてきている」と藤原課長。そこで同社は、技術的な難しさはあるものの、マイナス15デシベルを超える防音システムの開発も検討している。

◆

ヤブシタは社員教育に熱心に取り組んでいる。昨年は初めて、社員の「人間力」を高めるプロジェクト「PRO人間塾」を開講。6回にわたる講習のプログラムは、森社長と佐々木圭一氏（「伝え方が9割」の著者）が考案した。「経営コンサルではなく、冷熱の営業に携わってきた森社長がつくったからこそ、社員に刺さっている」と上田社長。同社はDXを積極的に推進していくが、根幹で重視するのはアナログの「人間力」。それは、最終回の講座のテーマ『愛に気づく、プロになれ』が象徴している。この取組は来年度以降も形を変えつつ継続していく。



地下シェルター用国産換気システム「ATバリア」

地下シェルター用換気システム発表

海外展示会に出展へ

ヤブシタはグループ会社16社を有し、多角的な事業を展開すると共にグループ間連携で新たな販路を開拓している。最近のグループの特筆すべき動きを紹介する。

プロテクトアーツ（代表＝小熊正輝氏）は昨年8月、国内初となる世界最高水準の地下シェルター用国産換気システム「CBRNE（シーバーン）対応地下シェルター用換気システム　ATバリア」を発表した。これは名古屋大学の物質創成ナノテクトニクス工学（山内・朝倉研究室）の技術協力により多層フィルタリングシステムを実現。空気中の微粒子、細菌、ウイルス、有毒ガス等を効果的に除去し、あらゆる状況下で安全な空間を提供する。現在までのところ、国産の地下シェルター用換気システムとして形にできたのは同製品のみという。4月に出荷開始予定で、輸出も視野に入れる。

国内では地下シェルターがほとんど整備されていないが、近年、整備を望む声が強まっている。またその際には、有事の際にも国内生産が可能なように、国産のシェルター用換気システムが求められている。そこでヤブシタグループ各社が連携し、名古屋大の協力も得ながら同製品を開発。板金工場を運営するグループ会社のヤブシタ製作所で内製化することに成功した。能力はもちろんのこと、開発スピードとデザイン性にもこだわった。国内の住宅メーカーから問い合わせがあるほか、米ニュース雑誌TIME誌に取り上げられたこともあって米国からも引き合いがある。プロテクトアーツは今年、海外の展示会に出展し、同製品を紹介する予定。開発や展示会出展には、国の補助金を活用している。

模型制作会社グループ入り

ウェザーコック社

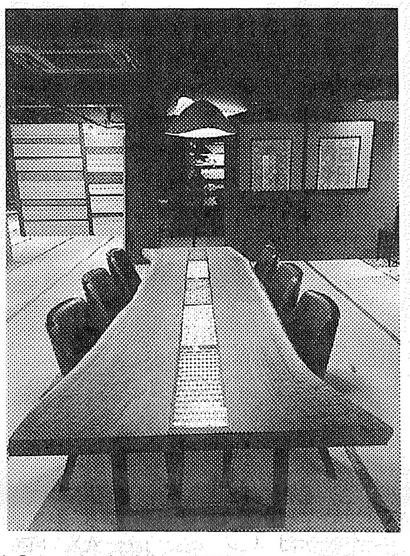
昨年10月にはウェザーコック（社長＝山崎記敬氏）がグループ入りした。同社は博物館等に展示する文化財の模型やジオラマ等、一品物の模型を制作する会社。同社の山崎社長は、12年前よりヤブシタの社外顧問を務めており、また中小企業診断士として、昨年まで北海道中小企業診断士協会の会長を務めていた。そうした中でウェザーコックから事業継承に関する相談を受け、山崎氏はヤブシタグループとのコラボレーションが見込めると考え、創業者から株式譲渡と事業引き継ぎを受けて社長に就任。今後、具体的なコラボレーションの形を模索する。

レーザー加工新工場を開設

今月、注文受付開始

グループ会社のMONOづくり（社長＝森忠裕氏）は、今月、北海道最大規模の木材・アクリル専用レーザー加工機を導入し、札幌市中央区のN6ビル1階に、新工場となる「レーザークラフトN6製作所」を開設する。木材・アクリル専用の加工機の導入はグループ初。組子風の襖や屏風等の和モダン建具、オリジナル製品まで、幅広い加工の注文を受け付ける。レーザーカットの最大サイズは1千500×3千200㍉。

同所では、レーザー加工機による加工の様子を見学可能。また、同社は同ビルにミュージアム型ショールーム「和モダンN6　北円山」も運営しており、ここには全国の様々な伝統工芸品を展示すると共に、同レーザー加工機による加工例を展示。その一つとして樹齢数百年の巨木を切り出した一枚板のテーブル「WAMODERN TABLE（和モダンテーブル）」も展示している。これは、サイズ・樹種・デザインがフルオーダーメイドのテーブルで、天板中央には強化ガラスを配置し、内側の装飾素材は自由にカスタマイズ可能。既にある葬儀社に納入を開始しており、この会社は故人の思い出の着物等を内側に装飾することを想定している。このほか柱（照明装飾）や吊戸棚（組子風）、屏風家具（組子風）といった、様々な加工事例を見学できる。こうした商品は、店舗装飾の建材としても利用できるため、同所には全国の工務店等も見学に来ている。ヤブシタグループとしてこれまで繋がりのなかった建設関係会社との関係性構築にも繋がっているという。



「WAMODERN TABLE（和モダンテーブル）」